

2019 アジア選手権報告書

参加団体名：仙台大学漕艇部	
S 杉浦 旭 3信夫 涼 2松浦大河 B 桑村 潤 コーチ：猪股優人	種目：軽量級男子舵手無しフォア 第3位

結果 軽量級舵手無しフォア 3位

1 レース前

道具

今回は Swift の艇を借りた。ピンが曲がっていたり、プッシュが普段と違ったり、ヒールロープが1セット足りなかったりと大変だった。なんとか知っている単語とジェスチャーで Swift のスタッフに伝え、リギングを終えた。オールは CROKER の ARROW を使用した。使用した事がなかった為キャッチしている感覚がなく慣れが必要だと感じた。

環境

韓国は早朝と夜は寒いが日中は暖かく、仙台と同じ気温で過ごしやすいかった。忠州のコースはかなり広く、漕いでいて清々しかった。思ったよりレーンの間隔は狭かったためレース中はブイを叩かないよう注意が必要だと感じた。また、レース会場のすぐ側には空軍基地があり、戦闘機の騒音がかなり気になった。出艇桟橋に帰艇してしまうハプニングもあったが、それ以降は何事もなくトレーニングができた。

韓国の食事は想像より食べやすく、むしろ食べすぎて体重がオーバーしないか心配になる程だった。本場のキムチはかなり辛く腹痛になる選手がいた為レース前は控えるようにした。

オープニングセレモニー

22日にセレモニーがあった。韓国の伝統舞踊やK-POPなどは生で見るのは初めてで、とても刺激的に感じた。その後の会食で、様々な国と交流をし、新鮮さと共にさらに気を引き締める事ができた。また、一緒に写真を撮ったり、話したりしていい経験になった。

トレーニング

4人のフィニッシュが合わず、何度もドリルを入れたり、長い時間意見交換したりと必要以上に止まって話している時間が多かった。日本でやってきた事を韓国でも変えずにやる事が大事だと感じた。乗艇を重ねるにつれて、オールの特性にも慣れてきて、少しずつリラックスして艇速を上げる事ができた。開会の前日には発艇のプレテストに参加した。本番と同じ環境でスタートの確認が出来た。日本のスタートと違ってアテンションからゴーの間隔が短かった。前の組のスタートの時に自分達のシュミレーションをする事が重要だと感じた。また、スタートの公式練習は日本でも取り入れて欲しいと感じた。アジア選手権も世界選手権のようなゲート式スタートと思っていたので少し残念だった。

2 プレレース

海外での初レースで緊張もあったが、ワクワクしている部分もあり思い切り楽しむ事を目標にレースに挑んだ。計量は余裕を持ってクリアした。ステッキボードに艇をつけた際は、ポートホルダーにペットボトルなどを渡す事ができ、ここは日本と違う点でとても良いと感じた。レースはスタートから思い切っていくことができ、インド、香港と横一線のスタートから始まった。500m付近で三番がハラキリをして立て直そうとしたものの動きが合わず、カミもありバタバタしてしまった。インドには大きく離されたが香港と並んでいた。第3Qからリスタートを入れ韓国を離すも、追い付かれ韓国と並んでいる状況で第4Qへ。ここで早めにスパートをかけて離し、3位でゴールした。500m付近でのミスオールが最後まで響いてしまった。また、忠州のコースはランドマークが無い為、500mごとの通過や真っ直ぐ進んでいるのかが分かりづらく、蛇行してしまった。レース後のミーティングでは決勝のレースは肩の力を抜いて思いっきり2000mを漕ぎ切り1位でゴールする事を決めた。課題が見つかったが同時に伸びしろが感じられるレースになった。また、忠州のコースは乾燥しているので喉を痛めないように気をつける必要があると感じた。

3 決勝

いよいよLM4-決勝。早朝はコース全体を深い霧が覆い出艇出来なかったため、エルゴに切り替えてUTやレースペース、スタートの確認をした。レースは予定通り11時55分に行うことができた。アップは自分達のクルーに集中し、日本でレースを行う時と同じ様に良い流れで行うことができた。自分達より前の組のレースの発艇コールに合わせてスタート練習をしたりし、スタートで一気に出る準備も万端にした。レースではしっかりとスタートを決められ、プレレースの時のようにインドと香港と日本の3艇が飛び出す展開になった。決勝はミスオールなく、プレレースの後に決めたように肩の力を抜いて思いっきり漕ぐことができた。1000mまでインドには出られていたが香港と並ぶレース展開だった。1000メートルから香港にじりじりと離されていったが第3Qの切り替えのコールで艇速を上げる事ができた。その後韓国との3位争いになったが、第4Qで得意のスパートが上手く決まり韓国との競り合いを制し3位でゴールすることができた。自分たちの持っている力を存分に発揮することができた。

4 アジア選手権で感じた事

今回、レースに出て他国の高いレベルに触れることができた。特にインドのスタートの速さとレンジの長さ、リラックス感は参考になった。金メダルを獲得するためには足の使い切りを早くする中でフィニッシュまで水を逃がさずに押すことが必要だとレースをして痛感させられた。自分たちの漕ぎに満足することなくもっと上を目指していく。

最後に、中村団長はじめ早稲田大学の徐さん、スタッフの皆様のサポートに感謝申し上げます。ありがとうございました。

今回の貴重な経験を今後の人生に活かしていきます。

